

【キーワード】

〔施設種別〕 高齢者施設 障がい者施設 子ども施設 住宅
 〔運営主体〕 市区町村 法人 NPO 個人 (補助金) 内閣府 国土交通省 厚生労働省 ()
 〔建物形式〕 1 棟単体型 複数棟集合型 団地型 (建物状況) 新築 増築 改修 一部改修 既存
 〔対象者〕 高齢者 障がい者 子ども ファミリー 多世代



写真1. 外観写真

家族的で穏やかな生活を過ごせるようにユニット型の生活環境で支援している障害者支援施設。1人ひとりの人格を尊重し、人との関わりに必要な職業観を身につけ、成長していくことを目標としている。松戸市内では唯一の障害者支援施設でハンディキャップをもって生きる人について世間への理解を深める役割を担っている。

施設情報

所在地：千葉県松戸市六実 1 - 6 4
 施設種別：障害者支援施設
 (旧・知的障害者入所更生施設)
 運営主体：社会福祉法人 まつど育成会
 敷地面積：3250㎡
 建築面積：2076.34㎡
 構造・階数：鉄筋コンクリート 3 階建て
 居室数：46 室
 運営開始：2004 年 4 月
 見学年月日：2009 年 5 月 26 日



図1. 周辺状況 (国土地理院より引用*)
 駅から徒歩 15 分の学校や住宅に囲まれた地にある。施設へは、東武線「六実駅」から徒歩 1 5 分、新京成線「新鎌ヶ谷」駅から徒歩 2 5 分を要する。

(以下、見学当時の内容)

運営概要

松戸市内で唯一の障害者支援施設であり、ユニット型の生活環境による支援が特徴的である。家族的で穏やかな生活を過ごせるように部屋などを配置しており、その中でも個人のプライバシーが守られるように配慮されている。すべての人を対等に、1人ひとりの人格を尊重することを大切にしており、個人の生活に対しても個別的配慮を心掛けている。また、ハンディキャップをもって生きる人への世間の理解を深められるように努めている。

知的障がいのある人だけでなく軽度の身体障がいの人も入所しており、どちらもマニュアルのようなものを作るのではなく、個人に合った支援をしている。

運営状況

入居者の定員数は長期が50人・短期が6人としており、現員は長期50人・短期2～6人である。入居する段階として、施設から転居する場合他に自宅や養護施設から入居する場合もある。グループホームの開設により転居の機会も増えたため、その度に新たに入居者を迎え入れているが、20人以上の待機者がいるのが現状である。

ユニットタイプの施設であり、1ユニットにつき3人の生活スタッフが担当して配属されている。43人の支援員と4人の事務員が交代で施設全体を支えていて、昼間は最大24人、夜間は最大3人の支援員で支援を行っている。作業スタッフは生活スタッフとは別に配置されている。



写真2. 指導員室兼事務室の様子 (図2①)

事務作業などを行う場所なため、デスクが多く並び
休むスペースとしては使いにくい。

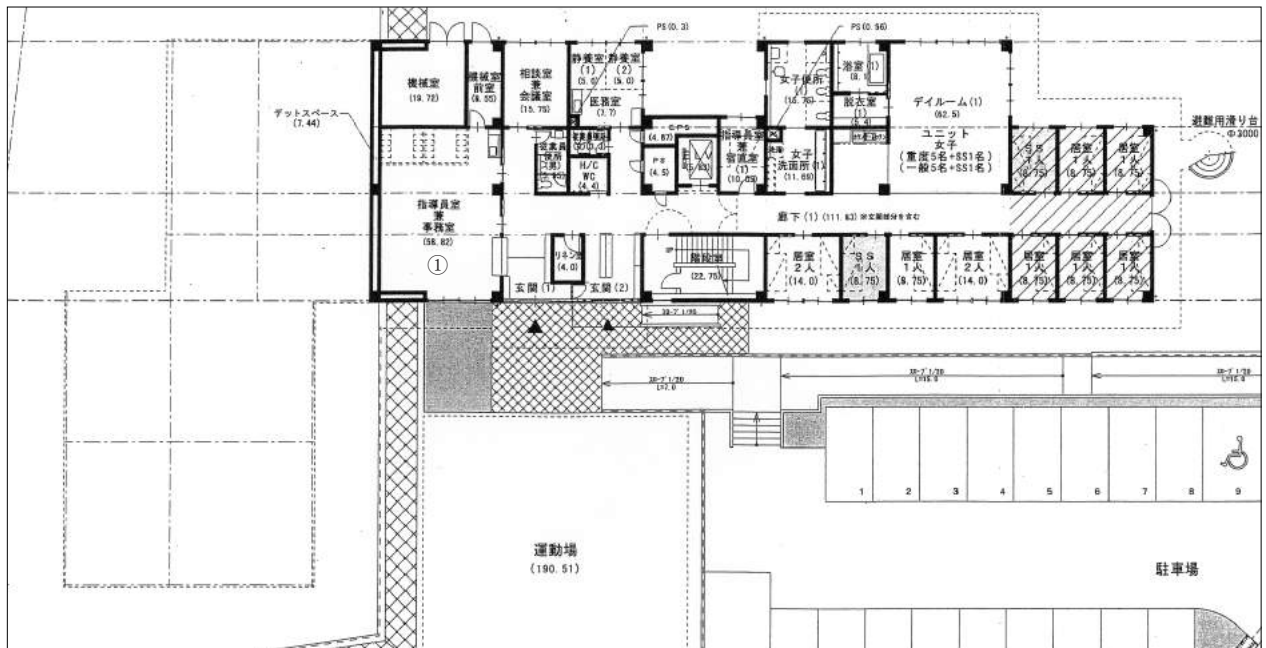


図2. 一階平面図 (見学時配布資料より引用)

施設内部について

居室を5つのユニットに分けて生活環境を支援している。男女で別のユニットにするだけでなく、人間関係を考慮して入居者を各ユニットに分けている。その他にも自閉症の有無など、障がいの度合いにも配慮している。5つのユニットのうち、利用者12人（個室8室、2人部屋2室）のユニットが三つ、利用者10人（個室6、2



写真3. 洗面所の様子

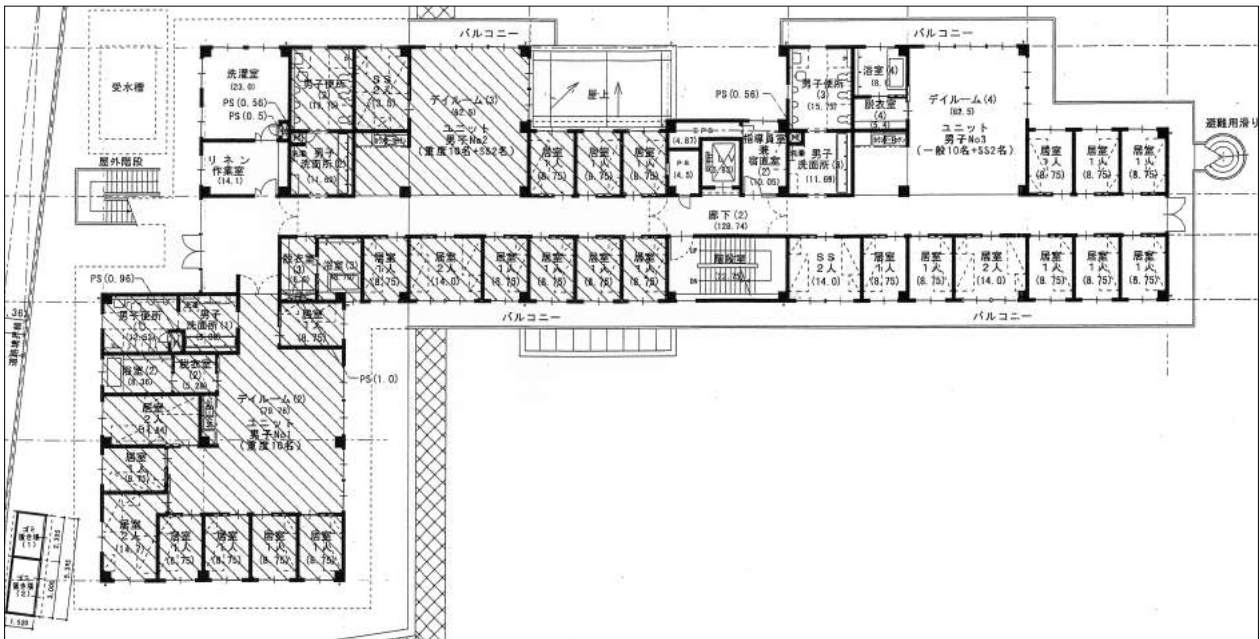


図3. 二階平面図（見学時配布資料より引用）

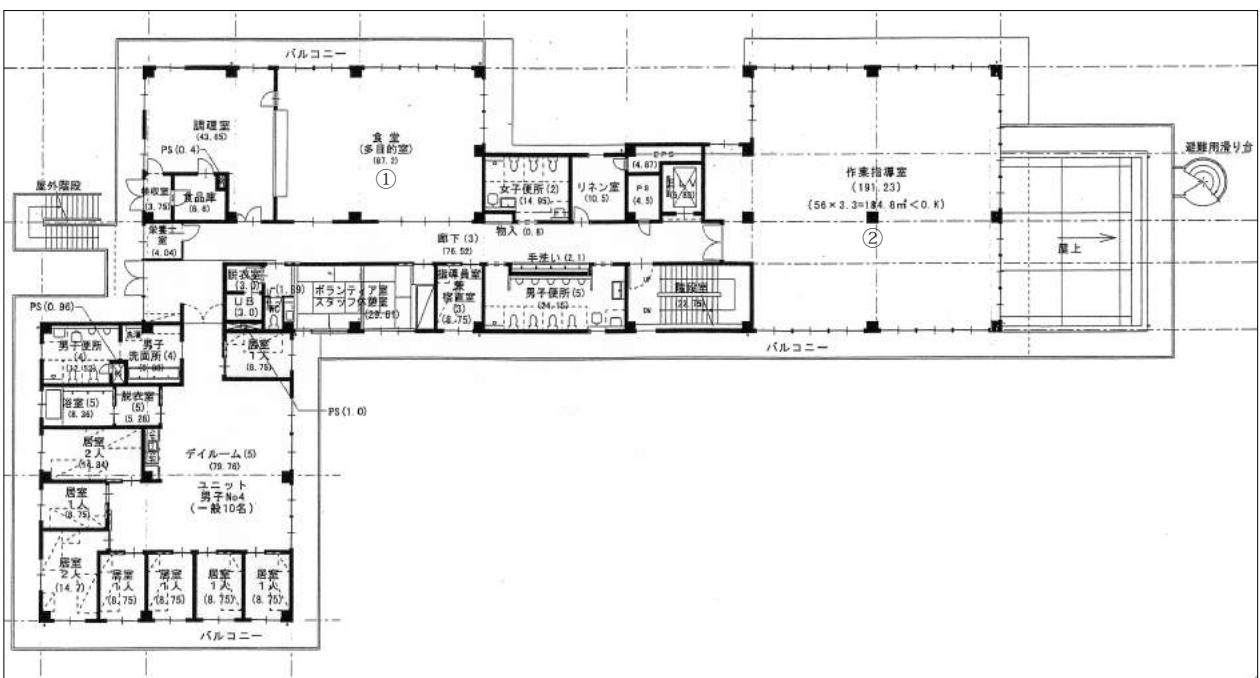


図4. 三階平面図（見学時配布資料より引用）



写真4. お風呂の様子

入浴時間は決まっていないため自由に入れる。介助が必要な人や少し行動障がいをもっている人の場合はパートのスタッフがいる夕方に入ってもらおう。



写真5. ユニット内の廊下

1階の女性ユニット内にある廊下。



写真6. バルコニーの様子

バルコニーは緊急時の避難を考えて回遊式になっている。避難訓練も月に1回行っている。

人部屋2室)のユニットが二つある。各ユニットには共通して、家族的な生活を過ごせるようにキッチンや浴室、トイレを配備し、広いリビングにはダイニングテーブルやソファを設置している。洗面所は個別に歯ブラシやコップ、フェイスタオル、洗面器が置けるよう設定をしている(写真3)。浴室は3人が入浴できるスペースを確保し、ゆとりを持って入浴できる環境に配慮している。

女性入居者には12人利用のユニットと10人利用のユニットが一つずつ用意されている。室内は女性らしいインテリアで飾りつけをしており、柔らかなソファや可愛いクッションを置き、気持ちが癒される生活空間を大切にしている。いつでも料理もできるように電子レンジなども備えている。また、自分で洗濯してから干すまでを毎日スムーズにできるように、室内の動線を工夫するなど、集団生活の中でも個人の生活動線が守られるように配慮されている。

男性入居者には12人利用のユニットが二つ、10人利用のユニットが一つ用意されている。個々の特性により環境を重視したユニットと、個人の生活を重視したユニットがある。環境を重視したユニットでは、音や光など刺激に敏感な人のために防音などに十分な配慮をしている。個人の生活を重視したユニットでは、日常生活の中で思い思いに過ごせるような工夫が施されている。お茶を入れたり、テレビを鑑賞したりできる場所など、利用者が楽しんで過ごせる空間作りに配慮している。

一階に女性ユニット一つとスタッフルームや医務室、二階には男性ユニット三つ、三階には女性ユニット一つと食堂、作業室がある。設計当時の図面の段階では、ユニット型ではない構造だったが、あとからユニットタイプの図面に書き換えた。そのため構造と動線上、どうしても廊下となってしまうユニットや、2人部屋があるなどのひずみも見られる(写真5)。その中でも利用者がストレスなく過ごせるように、あらゆる空間で様々な工夫が施されている。

利用者への建築的配慮・利用状況

ユニット内の居室や共用部分など、全てにおいて利用者の症状や性格、性別などに合わせて配慮している。例

えば男女や自閉症の有無によってそれぞれ配慮する点も変わるため、利用者1人ひとりが問題なく生活できるように動線や部屋のつくりを工夫している。ユニット内は居室を出るとすぐに共用スペースに出るつくりになっている。そのため居室はできるだけプライバシーが守られるようにして、入居者が1人になりたいときに利用する場所として機能を果たせるようにしている。ユニット内には2人部屋もあるが、仕切りを設けて1人になれるようにしており、もめ事が起きることを防ぐという点でも理にかなっている。自閉症の人のユニットでは、居室に自分で鍵をかける人もいるが、生活にメリハリを出すためにスタッフが部屋に鍵をかけることもある。

リビングで各ユニットごとに食事をする。入居者は三階の厨房で作ったものを運び配膳を行い、食器を洗うところまで自分たちで行う。ただし自閉症の人のユニットでは、ユニットで食事を取らず、3階の食堂まで行き食事をする。これは生活にメリハリをつけることで、自分がいま何をすべきかをわかりやすくするためである。リビングでは食事以外でも、作業後などの自由な時間で過ごす空間として利用されている。自室でゆったりする人もいるが、リビングでくつろぐ人もいるため、眺めや空間のつくりが大切だ。三階の女性ユニットのリビングは、窓からの眺めがよく、それを目当てに選んだ人もいるが、外からも丸見えになってしまうことを受けてガラスにスモークをかけた。設備的な配慮としては、感染症対策として温度・湿度計を設置している。冬場は加湿器を備え付けるなど、入居者の体調管理に努めている。

自閉症の人のユニットでは、環境づくりにより一層の配慮が必要とされる。自閉症の人たちは環境の変化に弱いので、はじめは何も置かずに場所自体に慣れてもらい、徐々にテーブルやいすを入れしていくことで、その環境に慣れてもらう。普段と異なる状況に対しての症状が行動にでることがあるが、それは支援者の配慮で防げることである。普段活用しないミニキッチンも、シャッターをして見えなくすることで余分な刺激を減らしている。不意の行動をした際などに安全のようにテレビもしっかり固定しガードしている。自閉症がある人でも、その人そのひとによって感じ方は異なるため、各々の居室では、カーテンもかかっておらず何も無い部屋もあるが、カーテンがかかってあり物も置かれている部屋もある。他に



写真7. 居室の様子

カーテンや家具など比較的に軽度の人の居室。

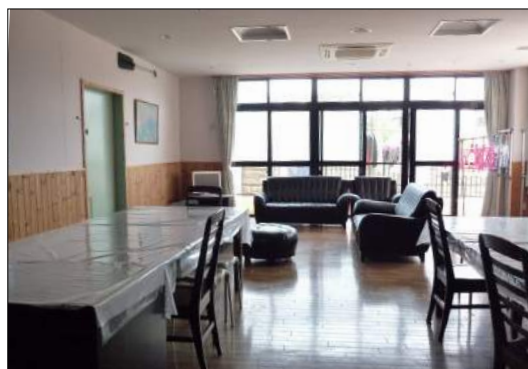


写真8. リビングの様子

日中の活動時間以外と夜間の寝るまでの主な居場所となるリビング。

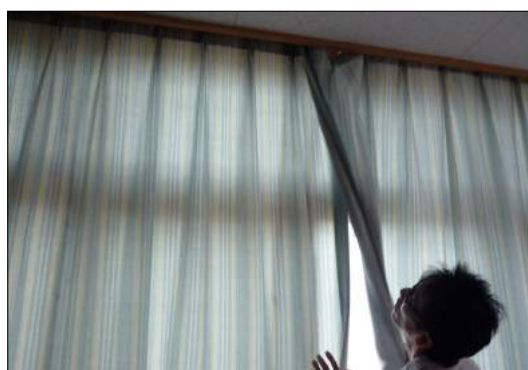


写真9. カーテンの仕組み

カーテンの接点が一部重なるようにして、カーテンがかからない箇所が気にならないようにしたり、付けはしずしがしやすいようにするなど、多くの工夫が施されている。



写真 10. 旧コンセント

カバーが外された後の様子。外れそうなカバーがテープで止められている。



写真 11. 食堂の様子 (図4①)

大きく窓が設けられ、陽の光が入りやすい造りとなっている。



写真 12. 作業室の様子 (図4②)

手元を細かく動かす作業など、様々な作業班に分かれて行う。

も細かいことが気になる人のために、カーテンの接点の一部重なるようにして、カーテンがかからない箇所が気にならないようにしたり、付けはずしがしやすいようにするなど、カーテンひとつとっても多くの工夫が施されている(写真9)。何かが気になるなら外したら済むことであるが、外してしまい何もない状況は生活感がなくなってしまう。入居者にとっては気にならなくて良いかもしれないが、物を少しでも置くようにする努力は必要である。そのために、隙間が気になる入居者が外してしまったプラスチックのコンセントカバーをアルミに変える(写真10)など、生活の要素に少しずつ慣れてもらうための配慮も見られる。後からユニット型にした結果、自閉症ユニットに行くためには他のユニットの中を通らなくてはいけないため、できるだけユニットの中は通らずに外から回って裏玄関を使うように心がけている。

三階の食堂では、作業がある昼に作業班ごと食事をとる。先述の通り、自閉症の人たちは普段の食事でも食堂でとる。食事は他の事業所に入ってもらいつくってもらっている。食堂の正面に宿直室があるが使い勝手が悪いため、入居者の休憩室として使っている。食事以外にもイベント等で活用している。

食堂と同じ三階にある作業室では、作業場所を3か所に区切り、それぞれ作業を行っている。作業班は作業の様子や人間関係を基準にして分けている。自閉症の人のための作業班や運動力が多く細かいことをする作業班、大雑把な仕事をする作業班、重度の人向けの作業班、パンづくりを行う作業班、以上の計5つの作業班がある。作業室内は自閉症の人が作業時と休憩時のメリハリが付けられるようにするために、作業所の一角にパーテーションで区切った休憩室を設けている。

見学時のヒアリング

□施設全体に関して

ユニットタイプの構造であり、より家庭的な暮らしを送りやすい施設になっている。生活感をなるべく出すようにする工夫や、過度にバリアフリーにしないことも入居者のへ支援の一つである。スタッフにとっても、目が届きやすく個別な関わりがしやすいため良い環境である。

しかし、従来の構造のままでユニット型に変更したため多少の課題がある。ユニット内に宿直室を設けたいや、生活を考慮したときに作業場所は別棟が良いなどの意見もある。またスタッフが息抜きできる場所の確保が最も課題で、休憩できるスペースは一階のユニットにはあるが他のユニットにはない。スタッフのためのスペースを増やすことが今後重要となる。

□今後に関して

平成18年11月にグループホームが完成した。そこへ毎年数人の入居者が移行していき、今までに17人の人がそこに移り住んでいる。はじめに入居施設に入ってもらい、その人の特徴を把握した上でグループホームへ移行してもらおう。今後も継続してグループホームへ移りたい人への支援を行っていく。

(作成者：東京電機大学 平尾笑香 2020.11)

参考文献

- 1) まつぼっくり HP <<http://www.pinecone.or.jp/company/01.php>> 2020年11月10日参照
- 3) 国土地理院 <<https://maps.gsi.go.jp/#17/35.790320/139.991491/&base=ort&ls=ort%7Cseamlessphoto%7Cnendophoto2018%7Cnendophoto2017&blend=0&disp=1111&lcd=nendophoto2017&vs=c1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m>> 2020年11月10日参照